

【ものづくり、人づくり、地域づくり】 震災・原発事故から1年

東日本大震災 福島原発事故から1年

～安心して暮らせる福島をとりもどそう～
原発いらない！3.11福島県民大集会へ参加しました

どうして福島の人々がこんなに苦しまないといけないのか

福島原発から電力の供給を受けていた私たち

福島の人々の苦難を 片時も忘れてはならない

ドイツは政治ではなく倫理の観点から原発廃止を決めました。倫理的な責任を取ることが人間の根本。

(大江健三郎)



先の戦争で、子供たちが「お父さんやお母さんは戦争に反対しなかった」と聞いたように、「お父さん、お母さんは原発に反対しなかったの？」と言うでしょう。放射能に汚染され続ける国の子供の当然の質問だと思います。

(浪江町 橘柳子さん)



【3.11の日に役職員で福島県・相馬の浜を訪問。現地の人と共に復興を祈る】

人々の協同で大地と被災地復興、海と大地の再生 福島県相馬の浜・「復光」工場を立ち上げ！ (福島県・相馬市)

●震災から1年。「復光」の工場を地域と人々の協同でついに立ち上げ！

震災による津波、原発事故の影響で、基幹産業である水産業が完全にストップしている福島県相馬市。仕事は無く、働き手は県外に流出し、生産人口がほとんどいない地域になりました。



修復工事がストップしている相馬松川浦漁港

そんな中でも、「相馬を明るくしたい！もう一度、元気な浜を取り戻したい！」と立ち上がったのが、NPO相馬はらがま朝市クラブの皆さん。その代表はかつて常総生協に「相馬の地魚」を届けていた、センシン食品の高橋永真さんです。相馬市内で毎週末「朝市」を開催し、昨年11月に皆さんから寄せられた冬物衣料や電気カーペットもここで必要としている相馬の皆さんへ届けられました。

そして今回、「復光第一号加工工場」がついに完成。「前浜の魚は使えないけど、県外の素材で加工を開始します。まずは松前漬を常総さんからの醤油を使って仕込んでみます！」と高橋さん。いよいよ、生産再開です。

●相馬松川浦の「青のり」も復活計画中！

相馬の松川浦は「青のり」(ひとえぐさ)の特産地で有名。津波で塩分濃度が変化し「青のりはまず着かないだろう」とみんなが諦めていたある日、試験用の網に青のりの種が着いていました。「またできる」。そう確信したのり専業漁師の久田要一さんは、昨年試験的に網を張りました。今後は、本格的な収穫に向けた協同調査研究も計画中です。



5年前、先代を引き継ぎ青のり専業漁師になった久田要一さん。現在は青のりの収穫が出来ないのでNPOで働く傍ら、来年に向け準備を進めています。

～まずは、「常総生協オリジナル醤油」で漬
け込んだ「松前漬」を、4月中には皆さんに紹
介できるように調整します。乞うご期待！～



ひたちなかの塩屋さんが相馬の復光工場へ機械を供出。常総職員・矢島が相馬へ搬送しました。



「松前漬」用の常総醤油の受け渡し。今回の「松前漬」は菊池さんに作っていただきます。

(左から常総・柿崎常務、青のり漁師の久田要一さん、料亭「みはらし」の親方・菊池義光さん、常総職員・矢島)

【原発いらない3.11福島県民大集会】

『原発事故で全てを失いました。どうやって生きろというのかです』

3/11福島県郡山市での「原発いらない3.11福島県民大集会」に組合員のみなさんと役職員で参加してきました。16,000人で会場の開成山野球場はぎっしり。大江健三郎さんの連帯のあいさつに続き行われた福島県民の方たちの訴えの一部をご紹介します。

●菅野智子さん

私は小学生の2人の子供を持つ母親です。原発事故を境に目には見えない放射能が降り注ぎ、放射線量が高い地域から遠ざかっても、自身や我が子が被曝し、いずれ影響が身体に現れるのでは、という不安がつきまとっていました。毎日、毎日、否応なく迫られる不安、「逃げる・逃げない」「食べる・食べない」「洗濯物を外に干す・干さない」「子どもにマスクをさせる・させない」など、様々な苦渋の選択をしなければなりませんでした。子供たちは、前のように外遊びができません。学校の校庭で運動もできません。運動会もプールも中止。

そこで、私たち家族は山形県の米沢市に自主避難しました。現在は借り上げ住宅に住んでいますが、二重生活や住宅ローンが重くのしかかります。仕事の都合で家計を支える父親は福島県に仕事があり、週末だけ子どもたちに会いに来ます。私は障がい者の施設で支援の仕事をしていますので、米沢市から福島まで、毎日通勤しています。

子どもたちは不満も言わず、元気に過ごしていますが、原発が無ければ、福島から米沢に来ることも、転校も無かったし、福島の友達と遊べた。米沢はマスクもいらない、外でも遊べる。でも「福島の方が楽しかった」と時折さびしそうな顔をします。私たちは福島第一原子力発電所の事故が無ければ福島を離れることはありませんでした。子どもを守りたいと米沢に来たこと、それでも福島が好きだということ、その気持ちは変わりません。

●菅野正寿さん

原発から約50キロの二本松市東和町で専業農家をしています。原発事故から一年、とりわけ自然の循環と生態系を守り、健康な作物、健康な家畜を育ててきた、何よりも子供たちの命と健康のために取り組んできた有機農業者への被害は深刻です。「落ち葉は使えるのか、堆肥は使えるのか、米ぬか、油かすは」これら様々な資材を検証しなければなりません。自分の畑にさえ行くことができず、避難を余儀なくされている。私たちは、耕したくても耕せない。

私たちは自然と向き合い、耕し、種をまき、農業の営みを続けてきました。放射性物質は予想以上に農産物への移行を低く抑えることができました。粘土質と腐植の有機的な土壌ほど、セシウムが土中に固定され、作物への移行が低減されることが分かってきました。つまり、有機農業による土づくりが、再生の光であることが見えてきました。

農水省が発表した福島県の玄米調査では、98.4%が50ベクレル以下です。500ベクレル以上出た、わずか0.3%が大きく報道されることにより、どれだけ農民を苦しめているか。私たちは、まるで「福島県民が加害者」のような、マスコミの報道に怒りを抱いています。マスコミが追及すべきは電力会社であり、原発を国策として押し進めてきた国ではないか。

農業と原発、人間と原発が共存はできません。生産者と消費者を分断するのではなく、都市も農村も、共に力を合わせて、農業を守り、再生可能エネルギーを作り出して、雇用と地場産業を住民主体で作り出していこうではありませんか。原発を推進してきた、アメリカ言いなり、大企業中心の日本の在り方を、今変えないでいつ変えるのですか。今、転換せずに、いつ転換するのでしょうか。「がんばろう日本」ではなく「変えよう日本」、今日をその転換点にしていこうではありませんか。



●菅野哲さん

私は今、飯舘村から福島に避難しています。飯舘村では高原野菜を作っていました。しかし今回の原発事故で全てを失ってしまいました。飯舘村の農家は、ほとんどが農地も、牛も、全てを失って、涙を流して廃業しました。もう飯舘村で農業を営むことはできないのです。避難しても何もすることが無いんです。農家は、農業をやるのが仕事です。どうやって生きろというのですか。誰も教えてくれません。



事故から1年を過ぎます。飯舘村は、去年の3月16日の時点で、44、7マイクロシーベルトです。この高い放射線量の中に飯舘村の村民は、放っておかれたんです。被曝をさせられたんです。誰の責任ですか。さらには放射能まじりの水道水まで飲まされていたのです。加えて、学者は、国の行政も「安全だ」と言ってきました。どこに安全があるのでしょうか。これをどうしてくれるんですか。答えてほしい。死の灰を撒き散らしておいて「放射能は無主物だ」といいます。何事ですか。原発事故は天災ではないのです。明らかに人災なのです。

私たちの今後の暮らしについては、住民の希望は何一つ聞いていません。希望の持てる施策は無いのです。こんなことで許せますか。良いのですか。飯舘村は放射能まみれです。そこでは暮らせません。新しい所を求めなければならないのです。

この悲惨な原発事故を2度と起こしたくありませんし、この事態を風化させたくありません。国民は忘れてはならないんです。福島県の皆さん、全国の皆さん、特に福島県の皆さん、県民が一丸となって、もっとも、全国に世界に訴えていきましょう。

●鈴木美穂さん

わたしの地元は郡山ですが、サッカーをしたくて富岡高校に進学しました。寮生活しながら、仲間と切磋琢磨の充実した生活でした。地震が起きたのは体育の授業中でした。校庭に避難している時、まさか原発が爆発するということは想像できませんでした。この日まで原発の事は何も理解していませんでした。避難する時、自衛隊や消防車が次々すれ違って行く光景は現実とは思えませんでした。小さな黒い包みを配っている人たちがいました。おそらく安定ヨウ素剤だと思います。配っている様子は、とても慌ただしく焦っているようで、私はやっと事態の深刻さが飲み込めました。



1号機が爆発し、郡山まで避難することになりました。郡山まで送ってくれた先生は泣いていました。先生には原発で働く知人がいたのです。原発事故を終わらせる事ができるのは作業員です。その作業員は私の友人の両親であり、誰かの大事な人だったりします。こうしている今も、危険な事故現場で働いている人がいます。その事を考えると私は胸が痛みます。

私は転校しましたが、すぐに学校にもなじむことができました。でも私は被災者になりました。被災者ということで、様々なイベントに招待されもしましたが、正直、かえって自分が被災者であることをつきつけられるようで、それが一番つらいのでした。「がんばれ」という言葉も嫌いでした。

時がたつにつれ、原発事故の人災ともいえる側面が明らかになってきています。原発がなければ津波や倒壊の被害にあっていた方々を助けに行くことができました。それを思うと怒り、悲しみでいっぱいです。人の命も守れないのに、電力とか経済とかいっている場合じゃないのです。私は原発について何も知りませんでしたが、今ここに立っています。私たちの未来と一緒に考えていきましょう。



県民大集会後の市内大行進にも参加。全国の人たちと共に、「原発いらない」をアピールしました。